

---

# 想勇伝

山猿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

想勇伝

### 【ZPDF】

Z5211A

### 【作者名】

山猿

### 【あらすじ】

平和な日常からある日切り離され、なお運命に立ち向かって行く少年の話。

## 第一話（前書き）

初めてなので読み辛い部分もあるとは思いますがよろしくお願ひします

「起きてたら、もう朝だよ。」

瞼を開けると白色のレースのオーロラが眼前に舞つた。それと同時に風が開かれた窓から部屋の中へとへつてきて、濁んだ空気を浄化していく。

僕が小さく呻き声をあげて枕を抱きしめると布団を剥ぎ取られてボクの身は冷たい空気に晒される。

「つたつともう…。寒いじゃないか。」

なきない声で姉に抗議しつつ僕は朝のまどろみと柔らかなマットレスの海から身を起せば手を天井に向かつて腕を伸ばして関節を解した。

眼を擦りつつ、僕の目の前で立ちして僕を睨んでいる姉さんに時間を訪ねると、彼女はいつそう不満げな表情を僕へ向けた。

「もう9時をまわってるわー。学校が休みだからってのんびりしきなんじゃないの？ ああ、さつさと起きて朝ごはんを食べて頂戴。いつまでたつても片付けらんないでしょ。」

そう言った後に、わざとらしく彼女は大きくため息をつくと、部屋から出て行き乱暴に扉を閉めた。扉を閉めた時の余りの音の大きさに僕は身体をビクリと震わせると、肩を竦めてモップ付きのスリッパに足を突っ込んだ。

階段を下りていいくと食器を洗っている姉の姿が見えた。僕が席へとつづるとすると、「手は洗つたの？ 小さい時からあなたは何度言つても…。」と説教が始まりかけたので、すぐに手を洗いに水が溜めてある桶のある家の裏へと向かう。外へ出ても彼女がまだ何か言つてゐる声が聞こえる。クドクドクド、こいつなつたらホント長いんだよな。

手を洗い改めて席につくと父がいないのに気づいて「父さんは？」と彼女に尋ねる。彼女は僕に背を向け食器を洗いながら「早朝に

何かバタバタ出てつたみたいよ？たぶん新しい鉱脈でも出たんじゃない。」と素つ気なく言つた。僕の父親は鉱山の上級管理職で早朝に出て行く事は滅多にない。暇だつたし、何があつたのか興味もあつたので、一刻も早く出かける為に急いで朝食をかきこもうとしたんだけど彼女の味付けの濃い事。すべてを胃に納めるのに随分と時間がかかってしまった。

寝巻きを着替えて外に出て歩き始めると、荷台を積んだ馬車が後ろから近づいてくる。後ろを振り向くとすぐに解つた。あんなくたびれた馬を今でもコキ使つてるのはルドルフじいさんしかいない。これで馬車の運賃をいくらか節約できる。郊外にある僕の家は鉱山までは遠いのでかかる運賃も馬鹿にならない。

「やあ、それ鉱山までの届けものだろ？？ ついでに僕も鉱山まで乗せてつてよ。」

ルドルフじいさんは僕を一警すると「ゼフィレッリのセガレか：乗りな。」と一言。止めるどころか、速度も落とさずに荷台を指で指す。まあ、主人と同様に荷台を引いてる馬も老いぼれて大したスピードも出ないから容易に乗れるんだけどね。

荷台に腰掛けて、流れていく麦畠を眺めると、所々で刈り入れに精を出す人々の姿が見える。そうしていると、だんだんと瞼のカーテンが僕の視界を遮つて行く。気づいたら僕はいつの間にか寝入つてしまつていた。

不意に身体が倒れて衝撃で目を覚まして眼をあけると目の前には色あせた荷台の床が見えた。ルドルフじいさんは僕の身体を押して退かすと、さつさと荷台の荷物を下ろし始めたようだ。借りを返すつもりで下ろすのを手伝う。彼は荷物をすべて下ろすと、礼を言う僕を見もせずに行つてしまつた。まあ、ルドルフじいさんはいつもこんな感じだから笑つて礼を返されたら逆にジンマシンが出るけどね。

鉱山の事務所にいくと、アーニスの母親で事務員のセリスさんがいて、部屋の端にある椅子では眼鏡をかけて幼馴染の赤毛のアーニスが

額に皺を寄せて分厚い本とにらめっこをしていた。

「あらコーネフちゃん、珍しいわね？一体どうしたの？」

僕に気づいたセリスさんが、心が晴れやかになるような笑みを浮かべて僕に尋ねた。

「いや、父に会いにきたんですが、父は何処にいますか？？」

そういうと彼女は困ったような顔をして顔をしかめた。

「うーん…今、会議室で会議に出席しているのだけれど…。いつ終わるかは私にもちょっと解らないわ。」

彼女が悪い訳でもないのに、そうとてもすまなさそうに言った。

「では、父が帰ってくるまで待ちます。どうせ暇で来ただけですから。」

そう言つて、僕はアニスの隣の椅子に腰を下ろした。

「やあ、アニス。元気？」

いつまでたつても、まるで僕が存在しないように振舞う彼女に流石に業を煮やして、そう話かければ、彼女は眼鏡のズレを治し眼を本から僕の顔へと向けた。

「ヒトが本を読んでるのに、うるさいわねえ。少なくとも、あなたがくる前までは元気だつたわ。」

母親と違つて彼女には、まるで愛想と言つものがない。僕がもし、彼女は橋から拾われた子だと聞いたら、まず疑わないだろう。やさしいセリスさんの子供とはとても思えない。

「そういうえばコーネフ。宿題は終わったの？まあ、あなたの事だから、まだだとは思つたけど、この前みたいに見せてなんかあげないんだからね。」

この街は農業と鉱山で成り立つていて、刈り入れの時期は農家の子は家の仕事を手伝わないといけないので、学校が2週間程休みになるのだ。僕やアニスは親を手伝う必要が無いので、宿題をざつざつと出される。その休みが、あと三日程で終わるのだが、まだ僕は完全に終わらせてはいなかつた。

「そんな事、言わないでよアニスだけが頼りなんだからさ。」

僕は苦笑し手を合わせて、お願いすると、彼女は僕を一警して再び目を本に向けた。僕が小さくため息をつくと、扉を開けて父が入ってきた。

「なんだ来てたのか？」

父は入つてくると、そう僕に声をかけた。早朝から働いていただけあつて大分疲れている様子だ。横のアニスは本から目を離すと、「こんにちは。おじ様。」と一言、頭を下げた。

「姉さんに聞いたら田の出前に出勤したようだけど何かあったの？」

そう父に尋ねると父は肩を竦めて、目を泳がせつつ水差しから水をグラスに入れた。

「実は、他言しないように言われてるから答える訳にはいかないんだ。まあ事故つて訳じやないから安心してくれ。」

父は困つたような笑みを浮かべてそう言つと、グラスの中の水を一気に喉に流し込んだ。

結局、しつこく聞いて父を困らせるわけにもいかないし、特にする事もないでの適当に雑談を交わした後、僕は事務所から出た。ふと鉱山の入り口を見ると皇国の役人が鉱山の中へと入つて行くのが見えた。鉱山周辺に広がるサウスサイドの町は大きいんだけど皇国の役人様が来る事なんて珍しかつた。大規模な金脈でも見つかつたのかな、なんて僕は気楽に考えていたのだけど、それが違う事が解つたのは後になつての事だつた。

## 第一話（後書き）

感想等頂ければ嬉しいです。

## 第一話

三日後、学校が始まった。僕が通うのはサウスサイド郡中等学校。ここに通う事ができるのは、基本的に、ある程度裕福な農家の子や鉱山で働く管理職や技術職クラスの師弟なんだけど、難しい試験にパスすれば授業料が免除される。僕は前者でアニスは後者だ。

僕は教室に入つて友人なんかとおしゃべりを楽しんでいると始業の鐘が鳴るのが聞こえた。いそいで席についてしばらくすると、担任のアドルフ先生が入ってきた。

アドルフ先生は温厚で優しい先生で、この人、実はルドルフじいさんの息子つていうんだから驚きだ。セリスさんとアニスの逆バージョンだね。

先生は開口早々に、みんなに宿題の提出を求めた。周囲はざわついて悲鳴も聞こえる。

僕はというと、宿題は無事に提出する事ができた。なんだかんだ言つて結局アニスに何度も頭を下げて手伝つてもらつたんだけどね。彼女はこの学校でも三本の指に入る程、成績がよかつた。ちなみに、彼女は成績以外でも男子からの人気も上位に食い込んでいた。そばかすはあっても顔は整つていたし、髪も綺麗だしね。あの性格だからラブレターなんて出す男子はあまりいなかつたけど。

確かに、一度だけ彼女は男子から贈り物を押し付けられた事があるんだけど、細かい装飾がされた櫛だったかな？その処分に困つた彼女は、なんとそれを僕に押し付けた。今は僕の姉さんが使つてゐるけど、まあ捨ててしまわないだけマシなのかな？

今日の授業は、午前中は皇国史と変化魔法の授業。午後からは生物学と数学の授業だつた。実は僕は数学がかなり苦手なんだけど今まで何とかアニスのおかげで何とか赤点を取らずに済んでいた。

用務員さんが最後の授業の終了の鐘を鳴らすと、まわりはため息の嵐。アドルフ先生は苦笑していた。

「よし今日はここまで、休みのせいでみんな少しだらけてるんじゃないか？麦の刈り入れで忙しかった連中は明日までに疲れをしつかり取つておくよ。」

そう言つて先生は教室から出て行くと、みんなも一様に教科書を鞄へ入れ帰つていいく。アニスはと言えば自分の席で、またぶ厚い本とにらめっこをしている。あいつもよく飽きないよな。

「アニス？帰らないのかい？」

そう訊ねるとアニスは顔を上げて僕を見た。彼女の三三つ編みが揺れる。

「うん、これをもう少し読んでからね。」

彼女の持つてる本を見ると、これは確か高等部で使う変化魔法の教科書だ。

「真面目だなあ。アニスは、ちょっと勉強しすぎじゃないの？」

僕は僕なりに彼女を心配したつもりだつたんだけど、彼女は「あなたは勉強しなさすぎよね。」と微笑みつつ僕に言葉を返すと、再び目を本へと向けた。返す言葉も無い。

友人と遊んで、しばらく雑談をした後に家へ帰る。玄関の扉を開けると何か甘い匂いがした。階段を上がり部屋を出る途中で、ふと姉の部屋を見ると扉が開いていたので、姉の姿がちらつと見えた。疑われたら困るから言っておくけど決して覗いた訳じゃないよ。姉はアニスの為にプレゼントされたはずの櫛で髪をといていた。きっと甘い匂いは香水の匂いなのだろう。それにしても、二階から玄関まで匂いがするなんて付けすぎだ。

部屋に入つて着替えると、僕は居間に寝転んで冒険小説を読み始めた。しならくして、姉が居間に入つてくると姉は呆れたような表情で僕を見下ろす。

「ちよつとコーネフ何やつてるの？今日はホークマンさんの家で鉱山設立記念日のパーティーがあるのよ？そんな小汚い格好でいく気じやないでしょ。」

姉はそういうと小さくため息をついて、クローゼットから僕のタ

キシーードを取り出した。姉はクドクドと煩いけど何かと僕に世話をやしてくれる。

ホークマンさんっていうのは鉱山の総合管理者。ようするに社長と言つたところかな。何かたまに自己陶酔したような話し方をする人で僕はあまり好きじゃなかつた。

身支度を整えて玄関へ向かうと父も母も正装で外出の用意をとつに済ませていた。僕はパーティーの事なんて、すっかり忘れてたんだけど、やはり僕の家族はみなしつかりしている。辺りは日が沈みかけていて僕らは馬車で街の中心部へと向かつた。

街の中心部にある高級住宅街。そこにホークマンさんの邸宅はある。僕の家も一般の人よりは広い方なんだけど、彼の邸宅に比べれば僕の家はウサギ小屋だ。邸宅に近づけば衛兵が招待状と不審な物を馬車に積んでないか調べる。彼らの無愛想さと言つたらアースといい勝負だろうね。

馬車を駐車し、案内されてホールに通されたんだけど、ここがまた広い。きっと、鬼ごっこなんてしたら楽しいだろうな。そんな事を考えているうちに会場に通される。パーティー会場に通されると色とりどりの衣装に身を包んだご婦人や並べられた料理が目に入つた。父はさつそく同僚や上司の人挨拶をしている。こういうの雰囲気は苦手だし何より料理が無くなつてしまわないか心配だつたので、僕は早々に料理の並べられたテーブルへと足を進めた。料理の目前にした所で服がグイツつと後ろへと引っ張られる。振り向くと綺麗なドレスに身を包んだアースがニヤニヤしながら立つていた。髪はいつもの三つ編みじゃなく、そのまま下ろしていてまるで夕日の帽子をかぶつてゐるみたい。

「アース！なんでここに？？

僕が目を丸くして彼女を見ていると彼女は得意げな顔で笑つて手を後ろで組み身体を少し屈めて僕を見た。

「なーに？なんで私みたいな事務員の娘みたいな身分賤しき者が、こんなトコにいるのかつて事？」

僕は慌てて否定する。

「いや、そんな事、思つてないよ。えっと… その…」  
何かうまい言い方を必死で考えていると、彼女はクスクスと笑い始めた。

「解つてるわよ。そんな事くらい。」

やられた。完全に彼女の方が一枚上手。

「あなたのお父様に特別ご招待いただいたの。まったく、貴方とは違つて優しくて、できたお父様ね。貴方と血が繋がつているなんて、とても信じられないわ。」

その言葉、そのままそつくり返す。

僕が料理を盛り始めると、彼女も見様見真似で料理を皿に盛つていく。彼女は料理の食材が珍しいのかキヨロキヨロと料理を見回して落ち着かない。

「そうキヨロキヨロしてると田舎物だと思われるよ。」

彼女の耳元でそう囁くと、彼女は僕を睨んで思い切り抓つた。つたぐ、すぐに暴力に訴えるんだよな。

誰か僕の名前を呼ぶ声が聞こえて振り向くと、僕の家族は既に席について僕らが来るのを待つていて。彼女もそれに気づいたようで、いそいそと家族が座る席へと歩みよつた。

「今日はお招きいただきありがとうございます。」

アーニスが頭を下げると、父は微笑んだ。

「いや、どういたしまして。沢山たべて、楽しんでいってくれ。それじゃあ、頂こうか。」

そう言つて父はワイングラスにワインを注いでいく。僕とアーニスの席には既にフルーツジュースが注がれたグラスが置かれていた。乾杯をした後に談笑を始める。うちの親つたらさ、直ぐに学校での僕の評判はどうか?とか、先生に怒られるような事ばっかりしないか?なんて不愉快な事を聞き始めるんだよね。内心アーニスが僕の宿題を手伝つた事をいつ言うのかドキドキしてたんだけど、アーニスは一向にその事は話さなかつた。無難な事しか言わないし、もしかして気を使つてくれてるのかな?

弦楽器や打楽器による演奏が始まる。さすがホークマンさん、やる事が豪華すぎるね。次々とみんな、パートナーを見つけて踊り出していく。さつそく姉は長身で格好のいい人に誘われて踊りにいつた。でさ、こういう時に限つて母が一人も踊つてきなさいみたいにちゃかすんだよ。確かに僕はさ、知らない女の子をダンスに誘えるような毛の生えた心臓は持ち合わせていないんだけど。でももう少

し息子を過大評価したってバチはあたらないと思うんだけどなあ。

まあ、当面の問題はだよ。母がそう口にした事で僕はアニスをダンスに誘わないといけない状況になつた訳だ。とりあえずジユースを一口飲む。甘酸っぱさが口を支配した微かな甘味を残して消えていく。とりあえずアニスを見てはいけない。怖気づくに決まってるんだから。椅子を後ろにずらして、ゆっくりと立ち上がるんだ。そしてゆっくりとアニスの方を見る。上からはアニスの夕日色の後頭部が見えるのでそれに向かつて話かける。

「その…アニス、一緒に踊るつか？」

彼女の髪がオーロラのように揺らめいて顔が僕の方へ振り向きはじめる。一瞬の事のはずなのにとてもスローモーションに見える。僕の視線と彼女の視線が交わる前に僕は彼女の顔から目を逸らした。

「えー…。コーネフとお？」

そら見ろ、そう思つた瞬間に僕の手に毛布がかけられたみたいに柔らかな感触と熱い体温が被う。

「いいよ、どうせ私くらいしか貴方の誘いにのつてくれるお人よしの女の子はいないでしようからね。」

彼女は微笑みを浮かべてそういつた。これは想定外。少々混乱しつつ、彼女の手を引いてホールへ立つと、音楽に合わせて足を進め始める。足を進めたと同時に彼女の身体がヨタヨタともたついた。

「何やつてるんだよ、アニス。」

そう小声で囁いて彼女の顔を見る。彼女は顔をキッと上げれば眉を顰めた。

「だつて、踊るのなんて初めてなんだもん、仕方ないでしょ？」

「はあ？」

そう言つたと同時に誰かの肩にぶつかる。ここで戻るのは正直きびしそうだ。

じゃあ、最初から断つておけばよかつたのに、といいかけてやめた。言い争つてる暇なんてない。ここは僕の腕で何とか踊りきるしかないといつても僕の腕なんてたかがしれてるけど。

「とりあえず、手を離さないでよ。そして足のリズムを合わせるんだ。」

「う…うん。」

彼女が足元を見つめながらそりそり囁く。

「足元ばかり見ない。他の人にぶつかっちゃうだろ？？」

「ごめんなさい。」

いつも、すべてにおいて完璧で、勝気な彼女がこんなにオタオタしている。「ごめんなさいなんて一度と、彼女の口から聞く事ができないかもね。声を保存する道具があればいいのに。そう思った瞬間に彼女が前へ倒れてきた。彼女の全体重が僕へとかかる。

「いつたあ…」

暗闇で彼女のか細い声が聞こえる。周りはザワザワとざわめく声も聞こえる。彼女のお尻がお腹に乗っているようで痛い。

「アニス…苦しい…ど、どいてっ」

親切な紳士と婦人の手伝いでようやく僕らは起き上がると礼を言つて足早にダンスホールから出た。一人とも息を切らしてお互いの呼吸音が重なり合つ。

「もう、下手糞なんだから。」

アニスが言つ。

「アニスが最初から踊れないって言つておけばよかつたんじゃないかな。」

いか。」

そう言つと、ダンスホールから戻ってきた姉が口を挟む。

「あら」「一ネフ？」いかに上手に踊れるかどうかは男性の手にかかるのよ？女の子のせいにするなんてみつともないわね。」

姉がにやにやと笑いながらそつ言つてアニスと向かつて「ねー。なんて声を合わせている。こうなつたら男がかなう筈もない。おとなしく、ここは撤退しよう。」

席に戻つて、食事を続ける。周囲はみんな楽しそうに踊つて談笑している。アニスがいて、家族が笑つて、そんな風景を僕は生涯忘れる事はないだろう。

麦の刈り入れも終わって、いよいよ暑さも本格的に蝉が泣き始め。鉱山の創立記念パーティから2週間後、隣国のシュリアス連邦国のマリマス郡に向かつて僕の住んでる国であるカノツサ皇国が侵攻を開始するらしい。僕らが住んでる地域周辺は高山帯によつて三つの国の領土が分けられている。南に行けばシュリアス連邦国。西に行けばアウグスト王国。シュリアス連邦国は僕らの国と同じくらいの大きさだけど、アウグスト王国はシュリアス連邦国やカノツサ皇国に比べれば小国だ。聞いた話によるとここには父の親戚がいるらしい。

カノツサ皇国とシュリアス連邦国の間を分ける高山帯には少しだけ切れ目があつて、それを塞ぐ形でそこにはシュリアス連邦国が建設した砦。イルハン城砦がある。

僕らの住んでる、この一体の地域は鉱脈が走つていて、僕らの街の鉱山はまだ採掘量が小さい。そこで皇国としてはイルハン城砦の向こうにあるマリアス郡の鉱山を狙つてていると言う訳だ。

こうなつたのも一週間前、皇帝陛下が崩御されて皇帝の兄君と弟君のどちらが次の皇帝になるのか決まっておらず強硬派の宰相が軍隊の運用権を握つてゐる為だ。

そういうことで、僕らの住んでるラーズ市にも今日、軍が進駐してきた。吹奏楽隊の軽やかな音楽で皇国兵が行進して行く。明後日にさつそく城砦に向けて進軍するらしい、行進して行く兵士の人的一部は死者の列に加わらねばならないのだろう。

戦況は我が軍、有利である！－そう軍は発表した。でも噂によれば部隊の約三割を失う敗北だつたらしい。それは軍の出した命令にも現れていた。

『ラーズ市二居住スル12歳以下ノ子供、及ビ婦人ハ、シャクセン郡へ疎開スルモノトスル。ソレ以外の皇国男子ハ軍ノ後方支援ヲ

担当スル事を命ジル。』

おそらく、大勝利したシュリアス連邦国はこの流れに乗つて、ラーズ市含む、この周辺地域に攻め込むつもりだらう。要はこの周囲の地域は戦場になると言つことだ。女性と子供は三日後に北のシャクセンへ疎開するらしい。もちろん学校は休校になった。

その一日後、僕とアースは街を見下ろす丘のササギの木の下で待ち合わせをした。待ち合わせの時間の少し前に来たつもりだつたけど、アースはもう既に木の下で座つていた。丘の縁にアースの来ている白い服が映える。

「遅いな～。コーネフ何やつてたの？？」

彼女は僕を見上げれば頬を膨らませてそう言つ。

「だつて、まだ街の鐘は鳴つてないよ。アースが早いんだよ。」

僕は小さくため息をつけば肩を疎めた。アースは「まあいいわ」と夕日色の長い髪を搔きあげる。

「明日、ついにいつちゃうんだね。疎開先で、いくら珍しい食べ物があつたつてドカ食いしてお腹壊したなんて事にならないようになしよ。」

僕はアースの傍に座ると、顔をニヤつかせながらそう言つた。

「うるさいわねー。コーネフこそ身体がひょろいんだから、兵糧運んでる途中にぶつ倒れるなんて事にならないよう気をつけないとね。」

彼女も負けじと戻す。僕らは顔を見合わせるとケラケラと笑つた。何でだろう、なんかとても可笑しかつたんだ。  
しばらく雑談をしていると、彼女は唇を動かすのを止めて黙り込んだ。

「どうしたんだい？アース？」

そう聞くと、彼女の細い指が僕の肩をギュッと掴む。

「コーネフ、絶対に死んだりなんかしたら駄目よ。敵が攻めてきたら逃げるのよ。かつこ悪いなんて思つたら駄目。小さい頃から弱虫のあなたなんかが勝てる訳ないんだから。」

何故かそう言つた時の彼女は迫力があった。僕は目をきょとんさせたまま、「う、うん解つたよ」とだけ、なんとか声に出し頷いた。

姉に買い物を頼まれて、それを終えた頃にはすっかり日が傾きかけていた。僕は自分の部屋で必死に勉強をしていた。だつて休校中でも勉強を欠かす事が無いようについて、アドルフ先生がたっぷりと宿題を出してくれたからね。

日が沈んで、しばらくたつてから父が帰つてきたらしく父の声が聞こえる。そうしてしばらくたつと僕の部屋の扉がノックされる。「父さんだ、ちょっと大切な話がある。入るぞ。」

僕はどうぞ、ヒノートに筆を走らせつゝ言うとドアを開く音がする。「率直に話すぞ。今からお前はこの子を連れておじさんの所に逃げなさい」

「はあ？」

そつ言つて振り向くと、いつもと違つて厳しい顔をして立つている父の隣に少年、いや髪を針のよつに短く切つたアーネスがいた。

## 第四話（後書き）

やつとい、序章が終わり物語が動いて行く感じです。

「アース…。」

喉からようやくその一言だけ搾り出す事に成功した。アースは黙つたまま俯いている。顔が少し赤いのは少し泣いたのだろうか。

「父さん…??」

そう顔を父の方へ向けた。父は厳しい顔をしたまま話を続けた。父の話によると、今日、父は仕事が残つていて一人で仕事場に残り仕事をし帰る時に役人の話を聞いてしまった。麦の刈り入れで学校が休みになつて父の職場を訪ねたあの日発掘されたのは何かの遺跡だつたそうだ。父が役人から盗み聞いた話によるとそこで女、子供を人柱に捧げ何らかの儀式をする事になつていて明日、疎開する話になつている女性や子供はその儀式に使用されるそうだ。それを聞いた父はいそいで自分の親しい友人にその事を話して回つたのだけど、信じてくれたのは事務員のセリスさんと数名だけだつたそうだ。

「いいか、父さん達は色々準備して向かう。セリスとも合流しなければならないからな。それに大人数で行くとアシがつきやすい。お前達だけで先に出発しなさい。」

「で、でも…。」

父は僕をキッと睨むと僕の両肩を掴み僕の瞳をみつめた。

「コーネフ、お前はもうすぐ元服だろ？もう立派な大人なんだ。なあに父さんの子だ、うまくできるさ。」

父は笑うとそいつて首にかけた銀細工に石の嵌つたネックレスを取り僕の首へとかける。

「お守りだ。持つて行きなさい。」

そいつて僕の肩を軽く叩くと軽く頭を撫でた。なんだい、大人なんて言つておいてまだまだ子供扱いじゃないか。

母に目を向けると、母は大粒の涙を流している。僕はそつと母の

手を握った。

「母さん心配しないで。向こうでまた会えるじゃないか。」

「そうね…。気をつけるのよコーネフ。あなたはいつだって詰めが甘いんですからね。」

さすが母親、解ってるね。そう思つて苦笑すると急に視界が暗くなり顔が圧迫される。

「わっ、姉ちゃん…やめっ…苦しい。」

そう言つて、もがくと漸く身体が開放されて、姉の不思議そうな顔が視界に入る。

「あれ? なんで私つて解っちゃったの??」

「そりやあ、あんな胸が小さいのは姉ちゃんしかいないからね。すかさずゲンコツが飛んできて僕は頭を抑える。

「もう、あんたつて口は最後まで生意気なんだから。軟弱で頼りないけど、ちゃんとアースちゃん守つてあげんのよ。」

姉はそう言つと母に付き添つた。父が茶色くなつた古い地図を持ち出し脱出方法を説明しはじめる。

父の話を要約すると、まず僕らはラーズ市を出てまつすぐ西へと向かう。そこには父や一部の人しか知らない昔使われていた坑道があつて、そこから山脈の谷間を流れる川へと抜ける事ができる。船は古い船がいくつがあるのでそれを使って川を下り、アウグスト王国に入る。川沿いに街があるので、そこまで行けば馬車でおじさんの住むカマラまで行く事ができるそうだ。

僕は急いで旅の準備を始める、といつても持ち出さなきやいけないような大切なもののなんて僕にはないけどね。それに旅行じゃないんだからあまり大きな荷物は持つ事はできない。最低限の荷物を持てば僕は部屋の扉を閉める。絶対にこの家、この部屋に帰つてくるんだ。

階段を下りるとアースはまだ俯いたまま心ここに在りと云つた感じだった。

「いってきます。」

家族にそう一言いようとアニスの肩に手を置く。

「アニス…行こう？」

そう声をかけるも彼女からは返事がない。僕は家の扉を開けると彼女の手を強引に引いて家を出た。

外は真っ暗だ。まあその方が逃げるのは都合がいいけど。家を出て暫く歩くと刈り入れの終わった畑が広がっていて、その後はただ平原だけが広がる。月あかりに照らされて地面に映るのは一人の影だけ。ザツザツザツと草を踏む音だけが辺りに響いた。そして僕は急に足を止める。

「アニス、君はいつまでそうやつてるの？？」

厳しい顔を彼女に向ければ彼女の服をグイッと掴み持ち上げる。

彼女の首はクタリと横に倒れた。

「君だってもう一度家族に会いたいだろ？…だったら今は頑張つて逃げ延びるしかないじゃないか！」

彼女の頭を両手で支えれば彼女の目を見つめる。彼女と一瞬目が会つも彼女の瞳から再び僕の顔は消えていった。一瞬見た彼女の瞳は絶望と虚無の混合色に彩られていた。

「絶対に、逃げ延びて新しい地で僕らの日常を取り戻すんだ。先は見えないけど歩みを止めたって何も見えてこないよ。」

「うん…」

アニスは蚊の鳴くような声でそう呟いた。まだ元気はないけど、何とかまともに歩くくらいはしてくれるようになつたので、少し安心した。

洞窟にたどり着いた頃にはもうクタクタだった。地平線からの光は空に浮かぶ雲を照らして空を真っ赤に染めている。

この辺りはずつと昔に父と来た頃と全然変わっていない。まるで人間のような形の岩の傍ら、その坑道はある。

「ほんとに…ここに入るのコーネフ。」

坑道に入ろうとするとアニスが不安げにそう言つた。

「なんだ、もしかして怖いのかい？アニス？」

「そ、そんな事ないけど。」

「

そういえばアニスは子供の時から暗い所が苦手だったな。アニスは子供の時は女の子とお人形ごっこと言つよりも、むしろ男の子と冒険ごっこに出かけるようなタイプだった。

彼女は木登りも棒切れを使ったチャンバラごっこも得意だつたけど、暗い廃屋に入るのだけは本当に嫌がつて無理やりその中に彼女を入れようとした僕は力いっぽいグーで殴られた事がある。

「大丈夫だよ。この坑道はほとんど一本道だから迷う事もないし、それにここはいくら暗い場所が嫌いな君でも気に入るとと思うよ。」

「どういう意味？」

「まあ、ついてきなよ。」

そう言つて彼女の手を引くと、坑道の中へ入つて行く。狭い坑道の中を歩いて行くと急に広い空間に出る。

「わあ〜…すつごおい

今まで不安そうな表情をしていた彼女は目を大きく開くと辺りを見渡し興奮した様子でそう言つた。

「だから、気に入るつて言つたろ？ しかしこいつやって久々に来ると圧倒されるなあ。」

この広い空間には強い光を放つヒカリタケが自生していて、まるで星空のように見える。彼女は感嘆の声を上げてそれに魅入つた。これで少しは彼女の気が晴れてくれればよいのだけど。

## 第六話（後書き）

もう少し書くつもりだったのですが、いい所でうまく切れそうだったので区切りました；；

ヒカリタケの淡い光を浴びつつしばらく歩くと、また坑道が狭くなつて行く。

「ねえ、コーネフ。本当に大丈夫なんでしょうね？」

アニスは不安げに僕の腕を掴めば、そう僕に尋ねた。

「大丈夫だつて。心配性だなあ。あ、ほら、遠くに光が見えてきたらどう？」

遠くに白い光が差し込んでいる。アニスも歩き疲れていて相当にへばつてているみたいだけど、そんな事よりも坑道から早く抜け出したいらしい。休憩しようか？と聞いたけれど、大丈夫だから早くと、せかされてしまった。

坑道から出ると其処は猫の額程の川原。上を見上げると高い崖が切り立つていて、狭い空が見える。川の流れだけがその殺風景な光景に彩りを与えていた。川原には古い舟が何艘か置いてある。昔、父から聞いた話によれば150年程前にここがずっと昔に坑道として利用されていた頃はここから隣国のアウグスト王国まで鉱石を舟に乗せて運んだりしたんだそうだ。

川に舟を浮かべる。船は大分昔のもののようだけれど丈夫に出来てるようで、僕とアニスは協力して、その船を川沿いへと移動させた。

ズボンの裾をまくつて川へ足をつける。冷たい流れが僕の皮膚を通して身体へと伝わってきた。ほんと冬じゃなくてよかつたよ。

「さあ、アニス乗つて。」

舟の半分を川の中へと引き込むとそうアニスへと呼びかけた。

「乗つた瞬間に船底が破れる…なんて事にならないでしょ？」

アニスは不安そうな顔をしつつ、船へと乗り込む。船底は僅かに軋んだが、アニスの身体を受け止めた。

「アニスは心配性だなあ。それとも最近体重でも増えた？？」

アニスはむつとした表情をして僕の頭をオールで叩く。

「無駄口叩かないの。ほら、さっさと船を引っ張つて。」

「はいはい。船を引っ張るとガリガリガリと嫌な音をたてた後、すと水面に浮かんだ。舟に飛び乗ると船は川を下りはじめる。川を下るだけだから、オールで漕ぐ必要はないけれど、舵は取る必要がある。はじめは慣れなくてアニスにも結構どやされたりもしたけれど、慣れてしまえばこっちのもの。1時間たつ頃には、船をすっかり自分の手足のように操れるようになっていた。

「静かだね……」

アニスは腕を川へとつけ、その流れを見つめながら呟いた。

「うん……」

周りから聞こえる音と言えば崖に根付いた木々のざわめきと鳥の声、川の流れ。そしてアニスの声。

「私達、これからどうなっちゃうんだらうね。国を捨てて逃げて、向こうでちゃんと暮らしていけるのかな?」

そんな事、僕には解らない。でも僕達には選択の余地なんか最初から無かった。

「不安なの?今、色々考えたって仕方ないよ。今から川を上つて皇國へ帰るなんて事も不可能だからね。だから今は僕らができる最大限の事をしようよ。」

「うん……」

アニスは小さく頷く。次の瞬間船が急にひっくり返った。

「アニス!……」

必死に水面から顔を出して彼女を呼ぶけど返事はない。気づかないうちに川の流れも急になっていたようだ。くそつ、何でこんな事に。

もう波立つ川の音しか聞こえない。僕の視界には黒いカーテンがゆっくりとかかって行き、何も考えられなくなってしまった。

## 第七話（後書き）

少し話のテンポが遅いと考へる事もありますが、少し長い話になる  
と思うので勘弁してやつて下さい。

「おい…おい、おいあんた。目を覚ましなよ。」

「ううーん…姉ちゃん。あと五分…。」

そう言って寝返りをうつと、ふと我に帰る。目を覚ますと呆れた  
ような顔をした浅黒い肌の女性が視界に入った。

「うわっ、すっ、すみません。僕は…そうだ!もう一人、川から  
人が流れきませんでしたか?」

「ん??一緒に流れていた子か??それなら、とっくにジャック  
が助けているよ。もう少し上流の所だが。」

彼女はそう言つと川の上流の方を指さした。彼女の格好…傭兵か  
何かだろうか。彼女に案内されて上流の方へと歩いて行くと、火が  
焚かれている傍らに人がいる。

「あ、伍長。もう一人の人は助けられたんスか?」

そういうながら、少年はアニスの服を脱がしにかかっていた。

「わっ!!ちょっと、君っ!アニスは女の子だぞ!!」

慌てて彼からアニスを引ったくる。アニスはまだ顔色は悪かつた  
けど呼吸はしつかりしていた。そりやあアニスは胸はないし、男と  
間違えても仕方が無いけどさ。

「ジャック…。あんたは男と女の区別もつかないのかい?」

伍長と呼ばれた女性は額に手の平をあて緩く顔を左右に振った。

「まつ、まさか…。じ、人工呼吸なんてしてないだろうな。」

混乱して、もう言葉も何度も噛んでるんだけど、必死に言葉を紡  
ぎだした。

「いや、そりやあ水いっぱい飲んでたし…。」

「なんだつて!!じゃあしたのか?したんだな?」

そうして少年に迫つていると、不意に後ろから声がした。

「あのお…、人口呼吸をしたら何かまずかったでしょうか。一応  
しておかないと自発呼吸が不十分だったのです…。」

振り向くと黒い髪の女の子が手に薪を抱えて心配そうな表情をして立っている。

「しましたよ。コフラン上等兵がですけどね。」

少年は肩にかかった僕の手を呆れた顔で払い落として、彼女を指しそう言つた。

「いやあ、この辺りじゃ乾いた木が無くて、遅くなつちやいましてたよ。」

薪をもつた女の子は笑みを浮かべてそう言つて歩き出すと、その次の瞬間に石に躊躇つて転び辺りに薪を撒き散らす。カラソノロンと薪は少し音楽的な音を立てた。

「つたぐ、何やつてんだい」

「今、心の中で転ぶ方に500ティナン賭けてましたよ」  
伍長と少年は少女の方へ歩み寄つて、少女と一緒に薪を拾い始める。

「う…う…あれ、コーネフ？」

アニスがゆつくりと目を覚ます。そして我に返つたように僕を睨めば僕を突き飛ばしてゲンコツを浴びせる。

「何すんのよ！－この変態コーネフ。」

服を脱がされかけていたのを助けたのに、この仕打ち。浅黒い肌の女性と白くて黒い髪の少女、そして生意気そうな少年は僕らをまるで見世物のように見て笑つていた。

「まあ、まあ。それよりあんたらこいらの人間じゃないんだろう？事情だって聞かなきやなんないし、あんた達には、ちょっと同行してもらつ。コフラン、ジャック。隊商に戻るよ。」

女性はそう言つと、ジャックに焚き火を消すように指示し、コフランは僕らの荷物を持つように指示した。

僕らは不安を心に抱きつつ彼らに同行する。

## 第八話（後書き）

ボリュームが少なくなっている気がする人もいるかもしれませんのが、なるべく週の更新を多くしようと思いまして。

川沿いから少し出ると、そこは草原。緑の絨毯のような大地が地平まで広がっている。

「とりあえず着替えからだな。その格好でずっといる訳にもいかないだろ？」「

隊商に合流すると伍長と呼ばれた女性は隊商の人と数分言葉を交わした後、そういうて僕らに手招きした。

「よし、えつと…。まああんた。私の着替えを貸してやるからそれに着替えな。コフラン。私の荷物に着替えがいくらか入ってるから選んでおやり。」

伍長はアニスを指してそういうと、自分の荷物を馬車から引き摺り出しコフランへと渡す。

「あの…、そんな私。このままで大丈夫です。お構いなく…。」

アニスがそういうと伍長は肩を竦め、その主張を拒否するように首を振る。

「なーに、言つてんだい。女の子は体を冷やしちゃあいけないって言つのは、私のばあ様のずっと前の世代から言われ続けてる事なんだよ。変に遠慮する前にわざと馬車の中でも着替えちまいな。」

そう言つてアニスとコフランを馬車に放り込むと大きい布で中が見えないよう馬車の入り口を布を広げて被い、僕らの方に振り向いた。

「あんたら何じろじろ見てんだい？言つておくけど男共は間違つても覗くんじやないよ！」

そう言つて彼女は僕らを睨む。ほんと、不本意極まりない。

「へいへい、了解。伍長。」

ジャックはそんな気はサラサラ無いといった感じで肩を竦めて答えた。

「ジャック、そいつの着替えはお前が貸してやれ。そいつはチビ

だからあんたの服でも何とか入るだろ?」

「なんかこの人、ムカツク。ジャツクは面倒くさそうに返事をする」と自分の荷物から着替えを取り出し僕に手渡した。

「何、ボーッと突っ立てるんだい、あんた?」

伍長は訝しげな表情をすると、僕にそう尋ねる。

「いや……僕は何処で着替えたらいのかなと思つて……」

そう答えると彼女は小さくため息をつき、馬鹿にしたような目で僕を見る。

「何、軟弱な事言つてるんだい。男のあんたは野つ原で着替えなんあに、あんたの裸を喜んで見たい奴なんかいやしないよ。」

そう言つてカラカラと笑う。そんな事を言われても恥ずかしいものは恥ずかしいんだから仕方がないよね。仕方なく誰にも見られないうちに馬車の陰で着替えたけど。

僕が着替え終わつてもアニスは長い間、馬車の中で着替えている。ようやく出でくると、アニスは体にピッタリと吸い付くようなパンツにゆつたりとしたシャツの姿だつた。

少しサイズは大きいやうだけど、旅に出る時は女とバレないよう薄汚れた服を着ていたから、それよりはまだずっと女の子っぽい。

「随分と時間がかかつたな。」

ずっと馬車の入り口の前で伍長は布を押さえていたので、彼女は不<sup>ふ</sup>服そうに文句をいう。

「伍長の服つてかわいくない服ばっかりなんですもん。選ぶのに苦労しましたよ。後で私のを貸してあげますからね。」

コフランはそう伍長に言い訳するとアニスに「ねえ」と笑いかけ<sup>る</sup>。アニスは居心地が悪そうに笑みを返した。

「うるさいねえ。私は服に興味なんて無いんだから柄だとか形だとかはどうでもいいんだよ。ほら、無駄口叩いてないで、二人共、出発まで装備の手入れと点検!ピクニツクに来た訳じゃないよ!」命令された二人は面倒くさそうにのそのそと作業へと移る。

「そうだ、あんた達には、身元と、この国に来た目的、入国ルー

トを聞かないとね。」

伍長はパサついた茶色い髪を高い所で止めた。僅かな前髪が彼女の顔へ数房垂れていく。

「あの…隊商の護衛の傭兵さんが国境警備までやつてるんですか？」

アニスがそう聞くと彼女は大きくため息をつく。装備を点検している二人のクスクスと笑う声が聞こえた。

「私は立派な正規兵だ。うちの国は金が無いから軍としても、ただ抑止力としてだけで訓練に明け暮れる訳にもいかないんだよ。だから、こうして国境を跨ぐ隊商の護衛をしたりして国庫に少しでもお金を入れなきゃならない訳だ。」

いじけた様な表情でそう言うと彼女は大きくため息をつく。

「あと、麦の刈り入れの手伝いとかな。」

「家畜の世話は楽しかったですねえ。」

ジャック、コフランの二人が横から口を挟む。

「いら！あんた達！口動かしてる暇があつたら手え動かしな！」

そう彼女が一喝すると一人は肩を竦めて作業に戻る。

「とりあえずだ。信じられないようならここに身分証明書があるから確認するなりなんなりしな。確認したら、話を聞かせてもらうよ！」

彼女は獸皮に書かれた身分証明書らしきものを僕の目の前に突き出し、不機嫌そうな声でそう言った。

「で、あんたらの名前は？」

彼女は指で万年筆をぐるぐると回しつつ首を傾ける。

「えっと、僕は「一ネル・ゼフィレッリ」

「私はアニス・グッドマンです。」

僕たちがそう答えると伍長とジャックは目を大きくして僕らの方へ視線を向け、声を揃えた。

「ゼフィレッリだつて！？」

「ゴフランだけは特に大きなリアクションもせずに「へー、一ネルさんとアニスさんとおっしゃるんですか。ようじくおねがいしますねえ。」とここにこ笑つてゐだけだつたけど。

「どうしたんですか？」

僕らが一人のリアクションに困惑していると、伍長がため息をつく。代わってジャックが僕らに説明した。

「ゼフィレッリつていうのは、カマラに住む司教様の血筋しか名乗っちゃいけない姓なんだよ。」

「どういうことですか？」

アニスがそう訊ね、ジャックが説明しかけると伍長がそれを遮つた。

「ジャック、後は私が説明するから、お前は作業を続ける。」

ジャックは肩を竦めると、僕ら同様に状況が飲み込めていないらしいゴフランに説明をせがまれ小声でそれに答えていた。

「つまりな、あんたが司教様の血筋の可能性が高いって事さ。もしかして、あんたカマラに知り合いが何かいないか？」

「ええ、おじさんがいるらしいんです。最も僕は会つた事すらないんですけどね。今も父に其処へ行けと頼まれたんです。」

「やつぱりか…。」

伍長は額を押さえた。そうして伍長はしばらく黙つて何か考え込

んだ。沈黙が続いてアースはかなり居心地が悪そう。

「あの… それで私達は、どうなるんでしょう？」

アースが限界を超えて沈黙を破ると、伍長は顔を上げた。

「ん… ああ… すまない。いや、すみません。そうだな、司教の血筋である可能性が出てきた以上、私の上司に報告をしなきゃならぬ。悪いですが、面倒はおかげしませんので本国まで、ご同行いただきますですよ。」

伍長がそういう終ると横からジャックが口を挟む。

「あー、駄目ですよ伍長。久しぶりに敬語や丁寧語使ったから、

言葉めちゃくちゃじゃないスか。」

「うるさいぞジャック。作業に戻れっ！」

伍長は恥ずかしさを隠すようにジャックを叱り飛ばすと、バツの悪そうに頬を搔いた。

「いや、そんな改まらなくたっていいですよ。僕だって同教だのなんだの訳が解らないし、丁寧な言葉を使われたって伍長さんが使いにくかつたらしょうがないですから。」

僕が苦笑して「いや」と俯いた。伍長は顔を赤くして「申し訳ない」と俯いた。

それから、僕は今までの事情を洗いざらい話した。別に言わなくてもバレないとは思つたけど、あとで何か発覚した時に気まずいからね。

「隊長、出発の準備終わりました。隊商の責任者の方がタイムスケジュールが遅れてるんだからさつさと乗ってくれとのことです。」

コフランは敬礼してそう言つと、重そうな装備類を担ぐ。あんなに細い身体の何処にあんな力があるんだろ。僕らは隊商の小さな馬車に乗り込むと、一路アウグスト王国の首都であるラザを目指した。

## 第十話（後書き）

いろいろの都合で忙しく更新する暇が中々ありませんでした。来月半ばまでは忙しいのですががんばってチャーチチャーチは更新していくと書かえています。

退屈な草原が続いている。コフランとアースは肩を寄せ合つてスースーと寝息をたてていた。ジャックは自分の大型の折りたたみ式のボウガンに鼻歌を歌いつつ油を注し、伍長は兵法か何かの書かれた本に目を走らせている。

「あのお…、首都まであとどのくらいかかりますかねえ？」

「あと一日といったトコですかね」

あまりにも暇で僕が伍長へそう訊ねると伍長は本に目を走らせたまま答える。

「まくいけば…の話だけど。」

ジャックがニヤリと笑つてそう言つて伍長がジャックの頭を手の平で叩く。

「不吉な事を言つんじゃない。つたく縁起でもない。」

伍長は小さくため息をついて叩いた方の手を撫でた。

「でも、伍長。この辺りだって弱いとはいえグラスウルフの群れが襲つてくる事もあるし、油断できないスよ。」

ジャックは頭を撫でながら不満気に文句をいふと、馬車の幌へ凭れかかる。

「そういうえば、コフランさんとジャックさんは皆さん互いに名前で呼んでるのに、なんで伍長さんだけは階級で呼んでるんですか？」

「ああ、それは伍長が自分のチヒロチヒロって名前が恥ずかしいからつて、普段は階級で呼ぶように…むぐつ、むぐぐぐ。」

伍長がジャックの口に手を当てて、寄りかかるとナイフを首元につきつけた。

「ジャックう？あんまり余計な事を言つんじゃないよお？いいだからね？？」

「じつ伍長つ。危ない…危ないですってつ。」

ジャックはひきつり笑いを浮かべ伍長の手をペシペシと叩く。結

構怖い人なんだな、この人。そう思つてはいると馬車の後ろから、ものすごい砂埃をあげて何かの物体が近づいてきた。

砂埃をあげているのは黒い体毛に包まれた物体。緑色の目が五つあり印象としては毛むくじやらの巨大な蜘蛛。高さは6mくらいはあるだろうか。

「あつ、姉さんつ。マズローですつ。」

ジャックが慌てたような声で叫ぶ。

「ちつ、わかつてゐよ。おい御者あースピードあげろお。追いつかれるぞ！」

伍長が顔を赤くして大声で怒鳴る。

「そんな事を言つたつて馬だつて随分と疲れてるんだ、これ以上スピードなんてでねえよ！」

御者も同じくどなり返す。

「おいコフランナあーいつまで寝てはいる？戦闘だぞーー！」

そう言つてこれだけ馬車内が騒がしくてもアーニスにもたれスースーと寝息を立てているコフランナに伍長が蹴りを入れるとコフランナは眉を八の字にして眠そうに目を擦つた。

「いつたいなあ……もうついたんですかあ？？」

「馬鹿つ！敵だ配置につけ！」

そう伍長が叫んだ瞬間馬車が横倒しになつた。目の前が真つ暗になり、馬の悲鳴とみんなの悲鳴が喧騒の「コーラスを奏でている。気づくと僕の顔はアーニスの貧相な胸に押し付けられていた。足ににぶい痛みが走る。僕の足は木箱に潰されていて身動きすらとれない。

「おい、くたばつてない奴は自分の名前を言え！ーーー！」

そう伍長が怒鳴る。

「ジャック健在つス

「コフランナ健在です……。」

呻き声とともに崩れるような物音がした。

「ジャックと私は外の状況を確認。コフランナは自分の装備品を搜索しる。魔法が使えて丸腰じややられるぞ。コーネフさんアーニス

さん聞こえますか？非武装の一人はそこでおとなしくしておいてください。」

僕らの上に覆い被さつていた幌が引き剥がされる厚い日差しが照りつけてそのままふしだに思わず目を細めた。

マズローと呼ばれた化け物は黒い毛に包まれた触手で幌を口へと運んでもぐもぐとほお張つている。

「う…うん…キャー…」

アニメは目覚めて、そう呻き声をあげた後、悲鳴をあげ喚きながら僕の顔を引っかき殴る。身動きがとれないから動くことすらできやしない。

「ちょ、ちょっとアニメ…！」いくら殴つても僕は荷物に潰されて動けないんだつたら！」

必死の声でそう叫ぶと、よしやく彼女は手を止めた。

「もう、そんなトコにいるあなたが悪いんだからね。それより目がさめたらこの様は一体どうなつてるの。コーネフ。」

そういうながら彼女は自分の胸と僕の顔の間に手を入れて僕の首をグイと引き上げる。変な体勢になつて首が痛い…。

「今から音響弾を投げて奴の気をそらすジャックは触手の届かない場所からやつの目を狙撃しろ。」

伍長の叫び声が聞こえる。が、このポジションが彼らが何をしているのか検討がつかない。

「コフランあ！装備が見つかつたなら長槍で奴を牽制しつつ使える最高レベルの炎魔法の詠唱をはじめろ！撃つ時には合図を忘れるなよ。よし音響弾を投げた耳を塞げ…！」

しばらくの間が開いた後、ものすごい音があたりを走り抜ける。キーンという音が耳の奥でうるさいくらいに鳴り続いている。

巨大な黒い毛糸球のようなモンスターは触手をくねくねと動かしている。その毛糸玉に矢が次々と突き刺さつて行く。

「ジャック、全然目に当たつてないぞ！もつと落ち着いて狙え！」

「そんな事いつたつて姉さん！あつー姉さん危ない…！」

「そんな事いつたつて姉さん！あつー姉さん危ない…！」

そう一人が怒鳴るような声の掛け声が聞こえたと思つたら、伍長に黒い毛の生えた触手がクルクルと巻きついて、伍長の体を宙へと攫つていった。

## 第十一話（後書き）

仕事がかなり忙しい感じですが少しづつでもがんばって連載していくと思つてますので、気長に待つていただけすると嬉しいです。

「くそつたれがああああ！」

伍長が血管を額に浮かせて触手を刺すも黒い化け物は少しも堪えた様子がない。それどころか伍長をグイグイと締め付けていく。

「グググググ… ぐああ

伍長は顔に脂汗を浮かべて顔を真っ赤にして唸る。

「伍長！！！」

ユフラナの叫ぶ声が聞こえる。やつと、荷物から抜け出ると化け物に向かって矢を放つジャックの姿が見えた。矢を何度も放つも化け物の目を捉える事はできず矢を撃ち尽くしてしまった。

「ジャック！！！もういいからコイツを発破で私ごと吹き飛ばせ！」

「そんな！！んな事できないスよ。」

ジャックが泣きそうになりながら怒鳴り返す。

「何故だ！お前はもう発破の初級研修は終了してるだろ！」

「そういう問題じゃ…」

ジャックがそう言いかけた時に化け物が大きな叫び声を上げる。見上げるとモンスターの目に数本の矢が刺さっていた。触手をくねくねと動かし伍長は宙へと放り出され、地面へと転がり落ちた。

「いたたたた、くそつ。

伍長がそう言つて呻き声をあげるとジャックが叫ぶ。

「師匠！！」

ジャックの見ている方向を見ると馬に跨つた数名の人影が見える。

「あれ？？小隊長さんが来たの？？街までは、まだ随分と距離があるみたいだけど…。」

ユフラナが首を傾げる。ジャックは「おーい」と大声で両手を振

つている。伍長は額に手をやり小さくため息をついた。

「ボウガンは落ち着いて狙い、数を撃ち込むより一発一発を丁寧に撃てと言つたでしょ？？まだまだ鍛錬の余地がありそうですね。」

僕らの近くまで来ると大型のボウガンを肩に担いだ女性の小隊長は口をきゅっと結んで笑った。

「申し訳ないッス。」

「気を緩めない。トドメを刺す前に気を緩めるといつか命取りになりますよ。」

ジャックの頭をコツンと叩くと小隊長はコフランの方に向く。

「コフランさん、やつちやつてください。大分弱っている様だし、詠唱を途中で止めたその魔法でもトドメをさせるでしょう。」

「あつ、し、しまつたつ。『じつ、ごめんなさい。』」

コフランはへこへこと女性の小隊長に頭をさげると長槍の先を化け物に向けた。長槍の先から放たれた炎は化け物を焼き飛ばしていく。

「ぴぎやああああああああああああ

化け物は断末魔の叫びを上げて少し暴れ動かなくなつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5211a/>

---

想勇伝

2010年10月10日00時56分発行